

炎症性腸疾患後の急性白血病

Acute Leukemia Following Inflammatory Bowel Disease: S.B. Hanauer, K.K. Wong, P.H. Frank, D.L. Sweet, J.B. Kirsner (Digestive Diseases and Sciences 27: 545~548, 1982)

潰瘍性大腸炎と大腸癌との関連は周知の事実であるが、消化管外での新生物発生も偶然より多く起こるように思われる。著者らは、緩解中の炎症性腸疾患の婦人に起こった急性白血病の2例を報告している。

症例1は、53歳の女性で、29歳で潰瘍性大腸炎を発病、全大腸炎を呈した。14年にわたり病気は継続したが、43歳のころから緩解状態に入り、治療も終了し、その後の10年間は定期的経過観察のみが行われた。

53歳になって白血病を発症した。29歳から53歳までの24年間に注腸X線検査7回をはじめ、合計94枚のX線フィルムが撮影された。皮膚への被曝が98.7rad、骨髄へは30radと計算された。

症例2は、53歳の女性で、45歳でCrohn病に罹患し、53歳で白血病を発症。7年間に89枚のX線フィルムが撮影に用いられた。皮膚に対して94rad、骨髄へは28radの被曝と計算された。

炎症性腸疾患に合併する新生物として、リンパ腫、胆管癌、肝癌、甲状腺癌などが報告されている。白血病に関しても、Fabryらの5例の報告があり、うち3例は10年以上の緩解中に起こっている。

放射線被曝と白血病発生との関連について、Rogersは、Crohn病の

患者で診断のための照射で骨髄に約25radが吸収された後に急性白血病が発症した1例を報告している。一般に照射と白血病との関連が言われているが、反対論もある。診断上の照射と白血病の関連が炎症性腸疾患で示唆されるが、直接の因果関係の証明は難しい。炎症性腸疾患の患者では、遺伝的感受性、環境因子、局所または全身の免疫機能、治療法、度重なる診断照射、更には未知の因子が、白血病や他の悪性新生物の発生に関係があるように思われる。すなわち炎症性腸疾患は、腺癌のみならず、白血病を含めた悪性疾患の高危険疾患とみなされるべきだろうことを著者らは強調している。

(愛知県がんセンター第1内科
小林 世美 抄)